

利根川・荒川の東遷

国土交通省 日本の川 利根川よりを引用して改変

現在の利根川は、関東平野をほぼ西から東に向かって貫流し太平洋に注いでいますが、近世以前においては、利根川、渡良瀬川、鬼怒川（毛野川）は各々別の河川として存在し、利根川は関東平野の中央部を南流し荒川を合わせて現在の隅田川筋から東京湾に注いでいました。天正 18 年（1590 年）に徳川家康の江戸入府を契機に付替え工事が行われ、この結果、利根川は太平洋に注ぐようになりました。この一連の工事は「利根川の東遷」と言われ、これにより現在の利根川の骨格が形成されました。

東遷前



利根川東遷と舟運

天正 18 年（1590）に徳川家康が江戸に幕府が開いたことにより、江戸が政治の中心となりました。そのため、年貢米の輸送や、寛永 11 年（1635）の参勤交代制度、江戸城普請などをきっかけとして江戸の人口が増加し大量の物資輸送が必要となりました。

東北諸藩では江戸への廻米によって換金する必要がありましたが、外海を通して江戸に向かう航路では、風待ちのために多くの日数を要し、鹿島灘や房総沖の難所を通るため、常陸の那珂湊に入り、途中陸送を伴うルートをとっていたが、輸送力が限られていました。

東遷事業により利根川水系は関東平野に巨大な水路網を形成し、関東地方だけでなく、外海ルートと結ばれた津軽や仙台など陸奥方面からも物資が盛んに行き交うようになりました。

このため利根川は、日本きっての内陸水路として栄え、本川・支川の沿岸には、荷を下ろす河岸が数多く設け

られ蔵や河岸問屋が建ち並び、賑わっていました。

明治 23 年（1890）には利根運河が開通し、東京への舟運は従来と比較して航路、日程とも大幅に短縮できたため運賃も安くなり、明治 24（1891）年には年間 3 万 7,594 艘もの船が利根運河を通りました。

明治 20 年代前半まで荷物輸送の中で重要な地位を占めていた舟運でしたが、明治 17 年（1884）の高崎線、明治 29（1896）の土浦線（常磐線）をはじめとする鉄道網の整備や道路の改良など陸上交通が発達し、舟運は徐々に衰退していきました。



荒川東遷

荒川が人の手によって“流れ”そのものを変えられた時代です。それを可能にしたのが徳川政権の誕生と技術の進歩でした。家康の命を受けた伊奈氏は、後に「利根川の東遷、荒川の西遷」と呼ばれる、利根川と荒川の瀬替えを行いました。利根川水系と荒川水系を切り離すこの大規模な河川改修事業により、荒川は熊谷市久下で締め切られ、和田吉野川・市野川・入間川筋を本流にする流れに変わりました。

これにより埼玉県東部の新田開発や荒川を利用した舟運が進み、舟運によって集まる物資により江戸は世界に誇る100万都市に成長します。その一方で、新たな水を受け入れることになった和田吉野川・市野川の周辺では水害が増え、堤防や水塚などがつくられました。

関東平野の治水は、代々関東郡代を世襲した伊奈一族が行い、長男の忠政、次男の忠治へと受け継がれています。



荒川は、東京湾に流れ込んでいた利根川の支流で、現在の元荒川筋を流れていました。



寛永6年（1629年）、伊奈忠治により荒川を利根川から分離する瀬替工事が行われました。「荒川の西遷」と呼ばれ、現在の荒川の流路が形つくられました。



▶ 荒川西遷と利根川東遷の概略図



浅間山大噴火（天明3年（1783））家治・家斉の時代



噴火により運ばれた石を利用してできた石垣（埼玉県本庄市）

利根川水系の水源山地には多数の火山が存在しています。これらの火山は溶岩と火山碎屑物との互層から成り、急峻な地形を呈しています。このため豪雨のたびごとに水源山地において多くの崩壊が発生するとともに多量の土砂が流下し、下流では河床の上昇等が発生し、治水・利水機能等に障害をもたらしてきました。

天明3年（1783）の浅間山大噴火は、わが国でも最大級のもので、利根川の支川吾妻川上流端にあった群馬県嬭恋村の鎌原集落を全滅させ、浅間山麓だけでも泥流によって多くの家が流され、多くの死者を出す大惨事となりました。

浅間山は、5月（旧暦4月）から噴火を始め、震動を繰り返し、8月（旧暦7月）の利根川流域が大雨に襲われていた時期に、大噴火を起こし、激しい降灰をもたらしました。

爆発によって吾妻川に流れ込んだ火砕流は、すさまじい泥流を引き起こしながら利根川に流れ込み、前橋にかけての沿岸の村々を襲いました。

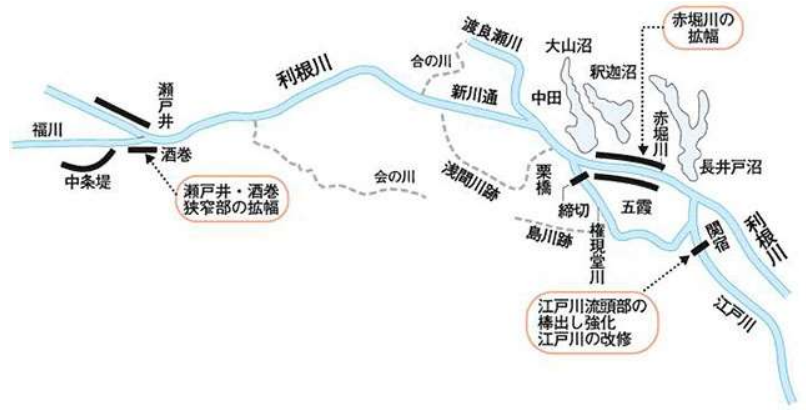
泥流は、烏川との合流点で3m堆積し、河口では流れ出した泥流が海を真っ黒にしたといわれています。

浅間山の噴火は、多量の泥流で利根川の流れを一変させただけでなく、土砂の堆積により河床の上昇を招いて、以後、利根川が氾濫しやすくなる要因となりました。また、この噴火は「天明の大飢饉」の一因にもなりました。

明治～戦前の改修工事の概要

利根川の治水事業は、明治 29 年の大水害にかんがみ、直轄事業として栗橋上流における計画高水流量を 3,750m³/s とした利根川改修計画に基づき、明治 33 年から第 1 期工事として佐原から河口までの区間、明治 40 年に第 2 期工事として取手から佐原までの区間、さ

らに明治 42 年には第 3 期工事として沼ノ上（現在の八斗島付近）から取手までの区間の改修に着手しました。明治 43 年の大出水により計画を改定し、栗橋上流における計画高水流量を 5,570m³/s とし、築堤、河道掘削等を行い、屈曲部には捷水路を開削し、昭和 5 年に竣工しました。さらに、昭和 10 年、13 年の洪水にかんがみ、昭和 14 年に利根川増補計画に基づく工事に着手しました。その計画は、八斗島から渡良瀬川合流点までの計画高水流量を 10,000m³/s とし、渡良瀬遊水地に 800m³/s の洪水調節機能をもたせ、取手より下流に利根川放水路を位置づけたものでした。

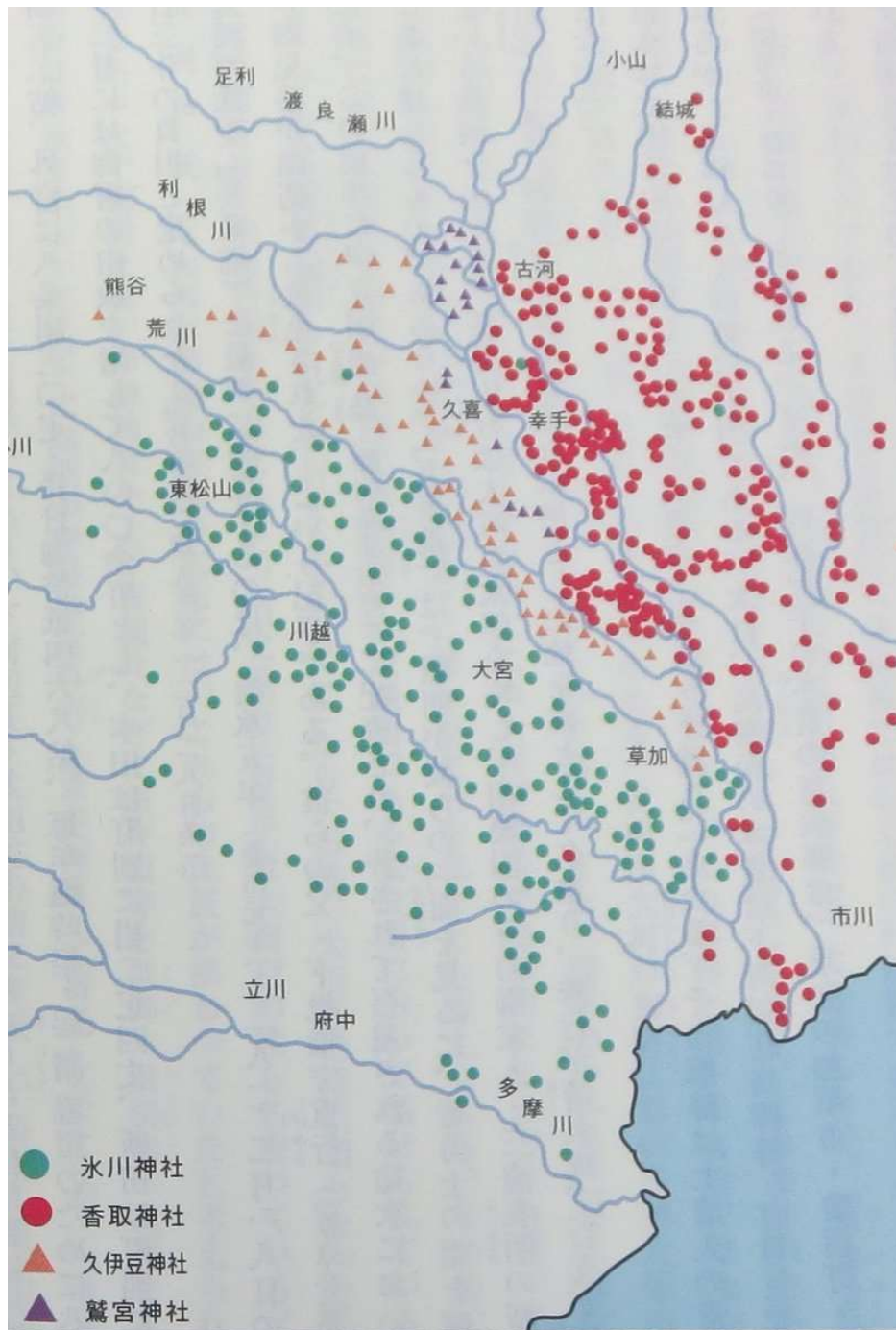


明治以降

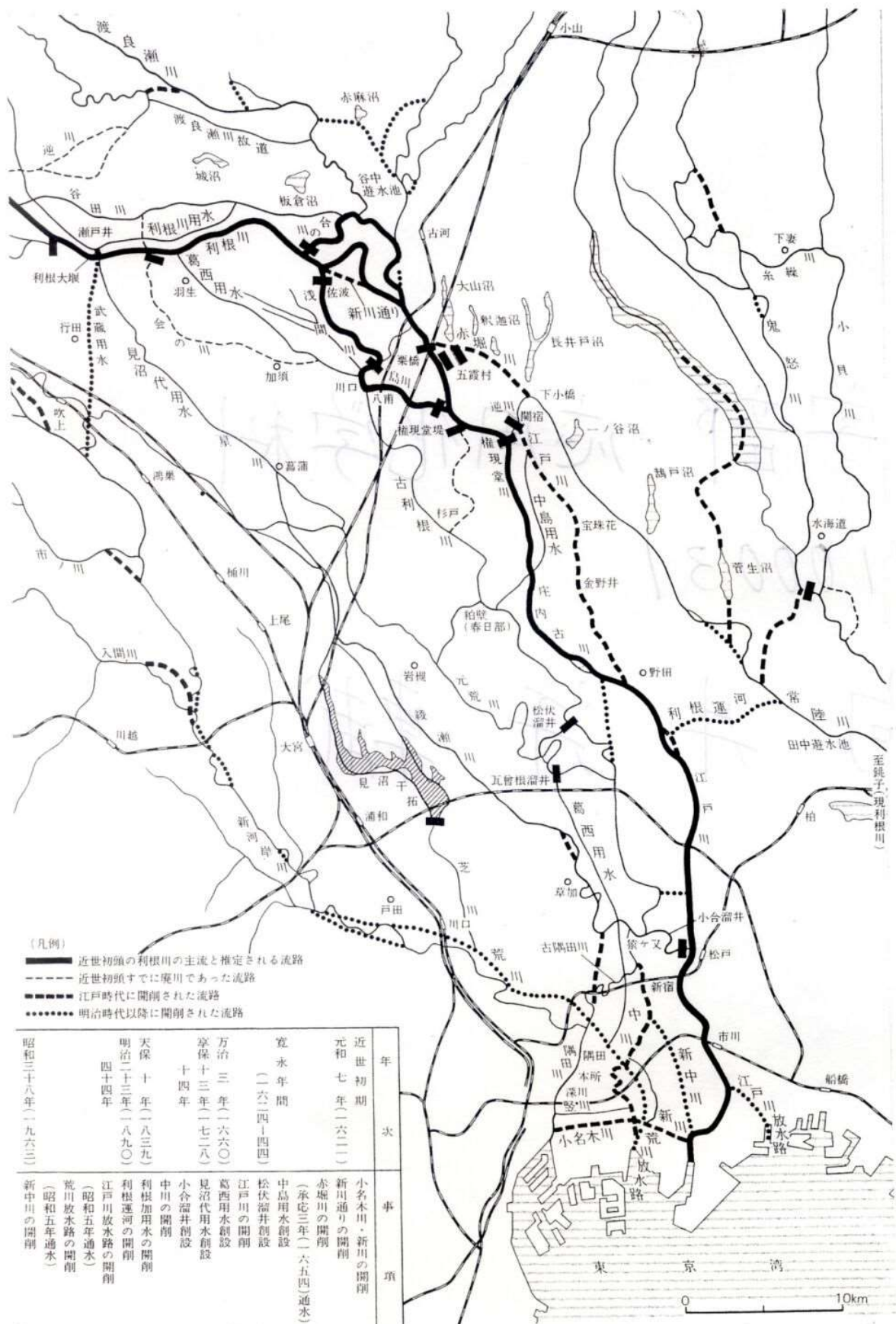


注：地形図、国境は迅速測図を基に作成

参考 古隅田川が氷川神社・久伊豆神社（武蔵国）と香取神社（下総国）の分布境界となっていると指摘
（久保純子 2014 江戸の地形環境 武蔵野台地と利根川デルタ ）



関東の香取神社、氷川神社、鷲宮神社、久伊豆神社の分布には、中世の国境とともに、荘園領域が密接に関わっている。下河辺荘域は香取神社、太田荘域は鷲宮神社の分布域に当てている（『幸手市史』より）



地図3. 近世以降の利根川流路変遷図

利根川治水(利根川東遷)

参:洪水と治水の河川史、江戸・水の生活史 他

